



第5回世界宗教者平和会議
メルボルン宣言

1989

1月27日オーストラリア・メルボルン

世界宗教者平和会議第五回大会は、オーストラリアのメルボルンにおいて開催された。本大会が非核地域の中で開催されたところを感謝をもって書き留める。我々約六百名の参加者は、世界の諸宗教を網羅し、約六十を数える国々から参集した本会議に先立ち婦人および青年の会議が開催された。本大会参加者のうち婦人は35パーセント、青年は15パーセントを占めた。宗教を異にするとはいえ、我々はすべて、平和を追い求め、正義を希求し、自然の尊厳性を維持しようとする共通の思いをもって参集した。

Signs of Hope

我々には多くの同じ思いがある。その第一は1987年以來の国際関係の進展に伴う希望感である。中米での平和への歩みは、世界のこの地域における悲劇的紛争の解決に進展をもたらした。イラン・イラクの戦争は終わり、また、ソ連軍のアフガニスタンからの計画的撤退に伴い、同国内の戦闘が速やかに終結される希望が生じた。南アフリカのナミビアからの撤兵と、ナミビアの完全独立に向かって事態は進展しつつある。軍備の分野では、米ソ間における中距離核戦力全廃条約の締結は、さらに幾つかの種類の核兵器の撤廃につながるであろう。戦争における毒ガスの使用を糾弾する最近のパリ世界会議に力をえて、化学兵器の製造、貯蔵、使用を終わらせる可能性がほぼ見えてきた。

多くの人々は、冷戦の終結がそう遠くないという望みをひとしく抱いている。永らく独裁的体制で知られてきた国々において、自由と民主主義が、現実の目標となり始めた。安全保障国家という観念のもとに對内的抑圧を行ってきた国々の幾つかにおいても、もう一度、新たに権利と自由が更新される見通しが開け、民主主義的慣行が台頭しつつある。中東情勢の変化は、イスラエル・パレスチナ紛争の解決の可能性を不可避的に増大させている。ウィーン会議（CSCE＝全欧安保協力会議）での合意は、欧州における人権問題に新たな希望を抱かせる。全世界的な生態学的研究は、地球的相互依存関係にある我々の新たな自覚をうながし、環境保全の方策を発見すべき必要性を生ぜしめた。大地が聖なるものであり、我々はそれと一体であるという観念は世界中に到る処で抱懐されている。多くの国々で、文化や宗教を異にする人びとが、多元的社会を形成する方途を模索している。そして全世界にわたって宗教者は、1986年のアッシジ、1987年の比叡山、その他の地におけるように、ともにつどって瞑想し、ともに祈っている。

第二に、二十世紀の終焉が近づくにおよんで、我々はある種の期待感を共有している。我々は、人類共通の人間性と運命に対する理解をより深めながら次の世紀を迎えたいと願う。二十世紀の紛争や諸問題は、これを二十一世紀に持ち込んではならず、またそれによって二十一世紀を損ってはならない。希望のしるしは存在している。欧州では1992年に一つの政治＝経済的共同体が出現し、内面的統合と外部的平和関係維持への努力が傾けられるであろう。

「二十世紀の終焉が近づくにおよんで、我々はある種の期待感を共有している。我々は、人類共通の人間性と運命に対する理解をより深めながら次の世紀を迎えたいと願う。二十世紀の紛争や諸問題は、これを二十一世紀に持ち込んではならず、またそれによって二十一世紀を損ってはならない。」

世紀末までには、香港とマカオは中華人民共和国に再統合され、植民地支配の時代は終わりを告げるであろう。全世界的な債務危機を解消し、より公正で長期的に安定した経済体制を作り上げなければならないという意識も高まりつつある。それに伴って、各国政府は、自国の経済・社会・政治・文化諸政策を批判的に自己検討するようになった。自由、自主性（アイデンティティ）、少数者の権利、公開性、改革といった言葉は、いまや新たな意味をもつにいたった。世界共同体のビジョンが形成され始めようとしている。

第三に、人間生活における道徳的諸価値の重要性についての意識がますます高まっている。人類は殺生与奪の権を手中に収めた。我々はもはや如何ともし難い盲目的な運命や政治的諸勢力に屈する必要はなくなった。合理性や技術は人間存在の究極的価値ではない。人権は政治その他の便宜によって規定されたり利用されるべきものではなくて、それ事態に具わる固有価値のゆえに用語されるべきものである。

第四に国際連合は再び活性化しつつあり、各国は国連を、平和、正義、自由を達成し維持するための効果的な手段として今一度活用し始めるにいたった。我々は国連平和維持軍が、1988年度のノーベル平和賞を授与されたことを喜ぶものである。国連は児童の権利に関する条約を締結しようとする特別の努力を払っているが、我々が二十一世紀に向けて作り上げてきた状況を継承するもの、すなわち世界の子供たちにとくに関心が注がれている。

第五に、マスコミその他の伝達手段をも包含する教育体制が進展を見つつあり、これによって人々に平和と正義を身に付けさせ、あらゆる民族、文化、宗教に対する尊敬を産み出しつつある。

最後に、多くの宗教がいまや率先して自らのもてる深甚かつ最善の霊的英知を結集し、宗教相互に、そしてまた同じ思いをもつすべての人々と協力しあって、永続的平和と、人間に相応しい社会的自然的環境を実現し、貧困、抑圧、エイズ禍をも含めた無用の病気やし、局地戦争、差別その他、人びとにつきまとう諸々の禍いに苦しまなくとも済むような世界を作り上げるために取り組んでいる。

五年前のナイロビ大会は、絶望的状况の中で開かれたものであっただけに、我々は以上のような希望のしるしを感謝するものである。とはいえ、我々はまた現実主義者でもある。核の脅威は依然として存在する。近年は化学兵器が使われ用された、多くの国々は途方もない債務をかかえ、外部からの経済的圧力、国家、多国籍企業、金融機関と敵対関係を続けている。拷問その他の非人道的な形態は今もなお目に余る。南アフリカのアパルトヘイト体制派は挑発的圧政的な方針をいぜん取り続けている。

消費者の浪費が度を過しているからこそ、それがしばしば人々の搾取や資産の枯渇としてあらわれるのである。環境は、結集を十分に考えることなく汚染されている。「小さな」戦争は、今なお戦われ、悲劇的な結果をもたらしている。軍国主義は、なお多くの社会を制圧している。難民問題も継続している。政治的宗教的狂信主義は、人権と自由を蹂躪している。あらゆるかたちの差別がいまなお、女性、民族的宗教的人種的集団、先住民、社会の底辺層に対して存続している。

我々は、信仰者として、人間の生活条件を改善に導いた諸変革を維持し、さらに、残された諸問題に立ち向かうために一体何ができるかを問い続ける。人間の貪欲、私利、傲慢は、世紀が変わったからといって消滅するものではない。人間の幸福と充実の達成は、いと高き霊的な力、平和は可能であるとの信念を我々に与えうる力により頼むものであることを、我々はつねに信じ続けなければならない。

我々は宗教者として、信頼により平和を築こうという呼びかけに呼応した。信頼はいろいろに定義しうることを我々は認識している。それゆえ、我々は先ず不信の壁をうち破らなければならない。我々にとって信頼とは行動を意味する。我々は個人として、民族として、さらには宗教教団として、我々を悩ます多種多様な不信の諸原因を把握しなければならない。他者の心に恐怖を起こさせるものは何かを我々が問うとき、我々はしばしば、他者のもつ恐怖は実は我々の不安や恐怖、我々の貪欲や利己主義、我々の権力欲や所有欲、そして我々の傲慢や無知に由来するものでありうることを忘れがちとなる。

我々は靈的な信頼によって支えられている。つまり、我々に生命を与え、美を発見させ、真理を認識させ、希望に生きることをえさせる宇宙の創造的な力を信じこれにより頼んでいる。この靈的信頼は、人を開放し人に力を与える。この信頼を支えるものは、我々の存在の根源、および他者、そして自然全体と調和を保ちながら生きていくことである。

Building Peace Through Trust

それでは如何にして我々は信頼により平和を築くか。

1、我々は軍縮と、紛争解決諸制度の強化によって信頼を形成する。このばあいの信頼は、相互恐怖に依存するよりも、相互依存を受容することの上に成り立っているから、危険負担と脆弱性を含むものである。とはいえ軍縮の分野において、最近の情勢の進展は、我々に希望を与える。大陸間弾道弾の五十パーセント削減、核兵器実験の全面的停止、生物化学兵器の製造および使用の禁止、通常兵器および兵器貿易の削減、すべての核兵器を紀元二千年までに廃絶することを盛り込んだ包括的軍縮プログラムの採択などによって、一層の進展が見られるであろう。

こうした過程を促進するために、我々は、平和地域、非核地域の拡大、宇宙空間における軍備競争の阻止、軍需経済から民需経済への転換、軍事研究から平和研究への移行などによって信頼醸成措置の発展を図らなければならない。このようにして、軍事目的に用いられていた資源は、社会的に有効に利用されることになり、軍縮と開発とが結び合わされるであろう。

最近の実績に照らして我々は、最も効果的な紛争解決機構の一つとして国連の役割を評価し、これへの協力を通して国連の役割強化に力を致したいと願う。同時にまた、国連の宗教NGO（非政府機関）という自覚において世界宗教者平和会議は、より一層活発に、何処でも力の及ぶかぎり、とくに宗教上の問題や勢力が紛争の一因をなしているような状態のところでは、和解のために働くものとならなければならない。これに関連して我々は、国連主催のもとに中東問題を議する国際会議の招集を歓迎したいと思う。

2、我々は万人に対する人権の擁護と維持によって信頼を形成する。このばあいの信頼は、責任を担うこと、つまり、すべての人びと、とくに、我々の社会において無力で社会の片すみに追いやられている人びとの福祉に対して進んで責任を取ることを意味している。

婦人と児童は、我々の社会の中で最も脆弱な集団である。強制労働、麻薬常用、性的搾取などは、すべて彼らの基本的人権の否定と無視の例である。彼らは戦争の第一の犠牲者であり、また現在千三百五十万を数える難民の八十パーセントを占めている。こうした諸問題が存するゆえに、我々は国連難民高等弁務官、および国連婦人開発基金の努力に対して、あらためて支持を表明する。我々はまた、児童の権利に関する国連規約を締結しようとする努力を支持する。先住民とその独自の文化の急速な減退と、環境の悪化とは同時に進行している。この窮状にかんがみ我々は、先住民の権利に関する国連の宣言案が、速やかに全面的に採択されるように努力を惜しまない。

すべての宗教者は、やむにやまれぬ道徳的義務感から、より一層正義が実現されるようにと働く。相争う政治的イデオロギーは今なお多くの国々で宗教的自由を制限している。宗教的狂信主義と不寛容はさらに不安に火を注ぐのみである。こうした抗争は世界の安定を脅かす。しばしば紛争は、スーダン、アフガニスタン、イスラエル—パレスチナ、南アフリカの例にみられるように、宗教と政治両面の要素を持っている。これらの抗争の非暴力的解決を我々は求めなければならない。これに関連して、我々は国連とその平和維持軍が効果的な役割を果たしていることを感謝する。我々はまた、世界人権宣言の四十周年記念を慶賀し、我々の各教団がこの祝いに参加することを呼びかける。国連およびその関連機構への信頼がとみに増大していることは将来への望みを我々に抱かせるものである。

3、万人に福祉を確保し、自然の生態学的バランスを尊重し維持する経済体制を創出することによって我々は信頼を築く。このばあいの信頼とは、我々が、豊かな自然を相続するものとして、これを保護し、これを分かち合い、これを完全なかたちで子孫々にまで伝えるために、そのよき管理者となることをいう。

経済体制は、社会の全構成員の福祉をいかに公平に確保するか、そしてそれが、一切の生命を保持する生態学的基盤をどのように大切に利用するかという倫理的基準によって評価されなければならない。

富めるものと貧しいものとの広がりゆく格差、すべての社会に影響を及ぼす負債の重圧、他国の豊かさと技術発展を支えるためにある国々の人的物的資源が搾取されていること、農村から都市への移動を余儀なくされて人々が大量に離脱することなどをみるにつけても、現在の経済体制には高い評価を与えることはできない。

我々は、財貨やサービスのより公正な分配と意思決定への参加を人々により広く確保するような新国際経済秩序の樹立という積年の望みを更新する。

経済的・政治的諸構造は、社会の宗教的構造としばしば不可分に入り組んでいることを思うにつけても、我々は世界の諸宗教教団に対して、権力構造との結びつき、および自らの経済活動を吟味することを求める。

諸宗教は、自然を大切にすることにおいて一致する。我々は自然を委ねられているとともに自然に依存している。全地球環境の濫用と悪化の証拠は、目にあまるものがある。我々は、海洋を有毒廃棄物で汚染し目先の利益や工業用地確保のために森林を伐採してきた。我々の資源のこうしたさまざまな無駄使いによって、温室効果は高まり、オゾン層は破壊されるにいたった。

我々の共通の未来がどうなるかは、環境や工業に対する現在の我々の行いかんによって決まるものであるから、環境問題への意識的関心を世界的に高めることを我々は呼びかける。我々の技術的資源は、地球生態系がますます向上し存続する方向へと向けられなければならない。廃棄物の処理、植林、再生不可能な諸資源の保全等に関する長期的計画が唱導され、速やかに実施されるべきである。我々は、まさに、二十一世紀の生きとし生けるものが継承すべき資産の管理者として責任を負わねばならない。

4、我々は自らと我々の子女に平和のための教育をほどこし、非暴力的変革方法および紛争解決教えることを通して信頼を形成する・このばあいの信頼とは、自らの何たるかを知り、他者を知り、他者の人間的尊厳を敬いこれによって、未知のものに対する恐怖、弱さからくる恐怖、自己と異なるものの迫害等を克服するときに得られる自信をあらわす。

非暴力は愛であり、愛は不正と暴力に対抗する最も強固な力である。真理と正義のために進んで苦難を受けることは、効果的な非暴力的行動となりうる。暴力の行使や威嚇は、信頼を破壊する。憎悪や、誤れる怒りもまた暴力の形態をなす。暴力の存するところ、平和の形態はありえない。暴力は、人間の生み出した状況に根ざすものである。それゆえに、我々の霊的なあかしとして、さらにまた、マスメディアの作り上げる敵のイメージや、暴力の賛美に敢然と抗して、非暴力行動を涵養することは、平和と信頼に向かってとるべき不可欠の手段である。

我々の教科書、我々の宗教教議、我々の政治的言辭のなかなど、暴力を、権力・威信・解答とみなして重視するところでは、どこにでも偏見や固定観念が見られる。こうした偏見や固定観念を存続させるような教育の在り方に対して、我々は挑戦する必要がある。「歴史」は強者によってしばしば作られるので、抑圧されている人は「不正なる歴史」から抜け出すことが困難であり、従って人を信頼しようとする彼らの気持ちが損われていることを我々は認識すべきである。

宗教教団、および宗教指導者は、他の文化や他の宗教に属する人々に関する積極的な経験学習を促進し、自ら独自の宗教カリキュラムを作成し、各教団で用いられているこうした資料を審査することに致しうるであろう。さらにまた、社会を変革する活動を可能にする強固にして愛に富む家族関係を形成するにはどうすればよいかを示しうるであろう。

「我らを恐怖より信頼へと導きたまえ」

軍備に頼ることを放棄し、我らの敵を受け入れ、これを愛することによって、我々を共通の恐怖より、共通の安全へと導きたまえ。他者の苦難のうちに人間家族としての我らの一体性を認識することによって、我らが無頓着より責任へと導きたまえ。地とすべての作られたものを継ぐものは、我らのみならず、他者および後に来るすべての世代であることを承認することによって、我らを貪欲と利己より慈悲の業へと導きたまえ。互いに学びあい、我らの疑いを克服し、忍耐と愛の力を増し加え、自らのうちにまことの平安を経験することによって、我らが無知より知識へと、暴力より非暴力へと導きたまえ。

Religions for Peace 